

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：35314

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20310

研究課題名（和文）小児期逆境経験者の愛着を安定化させる介入手法とその効果測定尺度の開発

研究課題名（英文）Development of an intervention method to boost attachment security in individuals who have adverse childhood experiences and an evaluation scale for the effectiveness

研究代表者

中井 和弥（Nakai, Kazuya）

環太平洋大学・次世代教育学部・講師

研究者番号：10908651

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、小児期逆境経験者の愛着の安定化に有効な安全感のプライミングを開発することであった。まず、安全感のプライミングの効果を測定する心理尺度（State Adult Attachment Measure（SAAM））の日本語版の開発を行った。アタッチメントの状態安定性などを測定する当該尺度の信頼性と妥当性を検討した結果、SAAM日本語版は原版と同様の性能を有していることが確認された。続いて、安全感のプライミングの有効性を確認した。その結果、日本の一般成人および小児期逆境経験を有する人々どちらにおいても、安全感のプライミングはアタッチメントの状態安定性を高めていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、SAAMの日本語版を開発したことから、日本人において愛着の状態安定性・不安定性を測定することが可能となった。また、効果量は小さいものの、本研究で用いた安全感のプライミングは愛着の状態安定性・不安定性に影響を及ぼすことが示唆された。さらにその効果は、小児期逆境経験者においても遜色ないことが示されている。愛着の状態安定性・不安定性は、抑うつや不安といった適応とも関連する。そのため、愛着の状態安定性・不安定性に対するより大きな効果量を有する介入手法を開発することができれば、対象者の小児期逆境経験の有無に関係なく、精神的健康度を高めることができる可能性も示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a security priming that is effective in promoting attachment security in persons who have experienced childhood adversity. First, we developed a Japanese version of the State Adult Attachment Measure (SAAM), a psychological scale that measures the effectiveness of security priming. As a result of examining the reliability and validity of this scale, which measures the security of the state of attachment, the Japanese version of the SAAM was confirmed to have the same performance as the original version. The effectiveness of security priming was then confirmed. The results showed that security priming increased security of the state of attachment in both Japanese adults and those who experienced childhood adversity.

研究分野：臨床心理学

キーワード：愛着 小児期逆境経験 安全感のプライミング J-SAAM

1. 研究開始当初の背景

小児期逆境経験とは虐待やネグレクト、親の離婚といった小児期の様々な苦難を指している。世界中のおよそ 57%の人々が経験しているという当該経験は、成人後の健康に深刻な悪影響を及ぼす (Hughes et al., 2017)。とりわけ、多様な逆境を経験している人々ほど、うつ病や不安障害、薬物依存症、がん、糖尿病といった様々な疾患に罹患しやすく、20 年近く短命であるという報告もなされている (e.g., Brown et al., 2009)。

小児期逆境経験のようなトラウマティックな体験と不即不離の関係にあるのが愛着の問題である。研究代表者は、小児期に逆境を経験した人々が不安定愛着を形成しやすいこと、その不安定愛着に基づく慢性的なストレス状態が、上述した成人後の心身の不健康につながっていることを明らかにしてきた (e.g., 中井他, 2020)。また、そのような不安定愛着に介入する手法を求めて、社会人格心理学領域の愛着研究で利用されている安全感のプライミングの有効性も、一般健常者において検討してきた (e.g., 中井他, 2021)。安全感のプライミングとは、愛や慰めの感覚と紐づいた刺激に暴露したり、親密な他者を想起したりすることで、愛着の安定性を向上させる介入手法である。当該介入手法は実施が容易であるだけでなく、愛着の安定性を向上させ、精神症状を緩和することも分かっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小児期逆境経験者において安全感のプライミングの有効性を検討し、そのような人々の愛着を安定化させる介入手法を確立することである。そのため、本研究では以下の 3 つを達成する。

第一に、介入によって生じる愛着の安定性・不安定性の変化を測定する尺度である SAAM (State Adult Attachment Measure) の日本語版を開発し、その信頼性と妥当性を検討する。第二に、開発された SAAM 日本語版を用いて、一般成人における安全感のプライミングの手続きの妥当化を行う。第三に、妥当化された安全感のプライミングを一度および複数回実施することが、抑うつと不安に及ぼす影響を明らかにする。

3. 研究の方法

まず、①SAAM の原著者と協議を行いながら SAAM 日本語版の試訳を作成する。続いて、SAAM 日本語版の試訳の信頼性と妥当性を検討するために、②一般成人を対象とした web 調査を行う。一定の信頼性と妥当性が担保された SAAM 日本語版を作成した後に、③一般成人を web 上で募集し、2 要因混合計画の介入実験を実施する。具体的には、実験協力者の半数を安全感のプライミングを行う介入群、残りの半数を統制群に無作為に割り付ける。両群の介入の前後には、SAAM 日本語版を用いて愛着の状態安定性・不安定性の測定を行う。④小児期逆境経験を有する人々に限定したうえで③で用いた介入デザインを行う。⑤一般成人を対象に、反復的に安全感のプライミングを実施することが、抑うつと不安にもたらすのかどうかを検討する。

4. 研究成果

①学術翻訳会社を利用することで SAAM 日本語版の試作版を作成した。その後、バックトランスレーションされた SAAM を用いることで、SAAM 原版と SAAM 日本語版の整合性について、原著者の一人である Omri Gillath 博士と協議を重ねた。Omri Gillath 博士の許諾が得られたものを SAAM 日本語版として②の調査に用いることとした。

②クラウドソーシングで募集を行った一般成人を対象に、SAAM 日本語版の信頼性と妥当性を検討するための調査を行った。まず、確認的因子分析によって因子構造を検証した結果、原版と同一の 3 因子構造（安定性、不安、回避）が得られ、適合度 (CFI=.91, TLI=.90, SRMR=0.08, RMSEA=0.08) と各下位尺度の内的整合性（安定性：.92, 不安：.88, 回避：.86）も十分な値が得られた。続いて、SAAM 日本語版と他の尺度の関連を検討した結果、SAAM 日本語版の各下位尺度は他の愛着スタイル尺度（日本語版 Experience of Close Relationship-Relationship Structure-Generalized Other (古村・村上・戸田, 2016) および日本語版 Relationship Questionnaire (加藤, 1998)）、他の状態尺度（日本語版 Positive and Negative Affect Schedule (以下, PANAS: 佐藤・安田, 2001)）と状態自尊感情を測定する Two-Item Self-Esteem Scale-State (以下, TISE-state: 箕浦・成田, 2016)）と想定どおりの関連を示した。以上の結果から、SAAM 日本語版は一定の信頼性と妥当性を有することが確認された。

③SAAM 日本語版が愛着の安定性・不安定性に関する一時的変動を測定すること、加えて安全感のプライミングの有効性を確認することを目的に介入実験を行った。その結果、SAAM 日本語版（安定性、不安、回避）・条件（介入条件、統制条件）・時点（介入前、介入後）の交互作用が有意であった ($F(2, 496) = 15.58, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .06$)。下位検定を行ったところ、介入前と比べて、介入後の SP 条件の安定性 ($F(1, 744) = 94.19, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .44$)、不安 ($F(1, 744) =$

26.06, $p < .001$, 偏 $\eta^2 = .18$) の得点が有意に高く, 回避 ($F(1, 744) = 27.95, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .19$) の得点は有意に低かった。ただし, 統制条件の安定性の得点も介入前と比べて介入後の方が有意に高かった ($F(1, 744) = 11.46, p < .01$, 偏 $\eta^2 = .08$)。また, 介入後において有意な条件間差がみられたのは安定性の得点 ($F(1, 1488) = 5.48, p < .05$, 偏 $\eta^2 = .22$) のみであった。

以上の結果から, SAAM 日本語版は愛着の状態安定性・不安定性の即時的変化を測定しうると考えられる。また, 本研究で用いた安全感のプライミングは, 愛着の状態安定性・不安定性に影響を及ぼす可能性が示唆された。

④スクリーニングされた小児期逆境経験を有する人々を対象に, 安全感のプライミングが愛着の状態安定性および他の状態尺度(気分状態(PANAS), 状態自尊感情(TISE-state))に及ぼす影響を検討した。安定性の得点を従属変数, 時点(介入前, 介入後)と条件(介入条件, 統制条件)を要因とする二要因混合分散分析を実施した。その結果, 時点×条件の交互作用が有意であった ($F(1, 93) = 18.14, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .16$)。また, 介入条件では時点の効果が有意であった ($F(1, 93) = 37.38, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .44$)。つまり, 介入条件においては, 介入前よりも介入後の方が安定性の得点が有意に高かった。したがって, 被虐待経験者を対象にした場合においても, 安全感のプライミングは愛着の状態安定性を増幅した。しかしながら, ポジティブ感情とネガティブ感情, 状態自尊感情それぞれを従属変数とした場合には, このような安全感のプライミングの効果が確認されなかった。なお, 課題前後の安定性の得点の変化量は, ポジティブ感情 ($r = .36, p < .001$) とネガティブ感情 ($r = -.33, p < .01$), 状態自尊感情 ($r = .22, p < .05$) の変化量と有意な相関を示していた。このことは, 愛着の状態安定性に介入することが感情状態や状態自尊感情に影響を及ぼす可能性があることを意味する。一方で, 本研究で実施した安全感のプライミングの効果量が弱かったことが原因で, 感情状態と状態自尊感情に対する有意な変化がみられなかったのかもしれない。

⑤安全感のプライミングを1日に1回, 4日連続実施することで, 抑うつと不安に及ぼす影響を検討した。その結果, 抑うつ ($F(1, 97) = 0.11, n.s.$, 偏 $\eta^2 = .00$) と不安 ($F(1, 97) = 0.02, n.s.$, 偏 $\eta^2 = .00$) どちらを従属変数とした場合においても, 時点(介入前, 介入後)と条件(介入条件, 統制条件)の交互作用は有意でなかった。このことから, 1日に1回, 4日連続安全感のプライミングを実施したとしても, 抑うつと不安に変化は生じないことが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中井（松尾）和弥・大浦真一
2. 発表標題 Japanese Version of the State Adult Attachment Measure (J-SAAM) の開発 その1：因子構造と内的一貫性の検討
3. 学会等名 第63回 日本心身医学会総会ならびに学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中井（松尾）和弥・大浦真一
2. 発表標題 Japanese Version of the State Adult Attachment Measure (J-SAAM) の開発 その2：妥当性の検討
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中井（松尾）和弥・大浦真一
2. 発表標題 Japanese Version of the State Adult Attachment Measure (J-SAAM) の開発 その3：セキュリティブライミングによる妥当性の検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------